



昭和23年 日本画科京都・奈良修  
学旅行記念 (平出敏子氏提供)

れるけれども、本校は戦時中満二十歳までに一定の学業を修得せしめるとゆう主旨の下に中等学校三年修了者をも入学資格ありとして容れたので、現在その年齢は勿論学力等まちまちであるから、そのまゝ横すべりさせることはあまりにルーズすぎる。旧制のまゝ押出すのがいい。従って來年度には旧制の二、三、四年生と新制の一年生とが在学することになり二十七年度になってすつかり新制による生徒に入れ代るわけである。旧制による卒業者が新制による卒業者に與えられるであろう資格と同等の資格を得るために何等かの補修過程〔課〕をもうけるとか、研究科をおくとかとゆうことについては今まで決定的ではない。

以上で大体本年予科を取らないことに関し、併せて今後の学校の在り方の方向をのべたのであるが、次に私の個人的な希望をのべさせてもらう。

勉強をしたくても生徒個人の生活状態から困るものがあり、学校の方でも不備であったり教職員の個人的事情で十分な授業に差

支えができている点は各学校とも同様であろうが、一日も早く十全な教育をうけられるように努力したい。たしかに青年の好学の氣風は興りつゝある。しかしその風が全部の生徒にあるとは認めにくい。しかし学校は一つの集團社会であるから各個人が一致せねば大きな校風振興とはならぬ。こゝは特に俺は俺でやればいゝという風が強い爲、又各科各学年がほゞ独立のような組織も氣分も残っているために、ことにまとまりがない。

しかしともかく最高の美術学校として発足する体制を整えつつあるのであるが、従来のように中等学校在学中から絵が好きだ、上手だからという考えで、一般の学問勉強をおろそかにするとか、入学時の実技試験に合格すればよいという考えでは今後の美校への入学は覚束ないとおもう。実技教官の多くの意見も同様であつて、すなおな健全な知能と技術をもつもので一生の仕事として藝術作家として困難に堪えてゆける素質と情熱あるものが欲しいわけである。予科を持たず一般新制高校修了者を入学資格としようとするのも一つはこの教官達の意向を反映させているのである。この点將來の入学志望者諸君にはっきりとわかつてもらいたいとおもう。

東京美術学校教務主任 村 田 良 策

(『美術手帖』第四号、昭和二十三年四月)

#### ⑧ 校内雑居、寄宿舎

戦前の本校には学生寮は無かつた。それを設ける契機となつたのは、終戦直後に倶楽部その他の建物に家を失つた職員や生徒が雑居

したことにあつたと言えよう。学校当局は止むなく倶楽部その他を生徒の仮寄宿舎として居住を暫く黙認することとした。昭和二十三年七月二十九日、学校当局は文部省体育局長よりの寄宿舎現況調査要請に対して次のように答申している。

生徒寄宿舎について説明〔答申案〕

終戦后授業平常に復したるも戦災の爲め家を失ひたる者及下宿焼失上京困難なる者等百五十名以上あり 従来本校には寄宿舎の設備無く此儘放任するに於ては授業を受くる事困難にして由々數問題を生じべきに付き取敢へず約百名を倶楽部（職員生徒集合所）陳列館別館（三十坪）元柔剣道場（六十二坪）元弓道場（十六坪）並に倉庫を開放收容せるも間仕切に要する経費なく生徒自身にて間敷切をなし雑然と居住し居りたるも防災上及衛生上甚だ感心に堪へず 昨年度に於て間仕切に要する経費工事費五万五千圓の配当を受け前記倶楽部を仮間仕切をなし十八室三十八名を收容し居住なし得たるも他の家屋は経費なく生徒自身間仕切りして居住し居る現場にて右は何れも寄宿舎としての態形をなし居らず 従つて寄宿舎費の徴取もせず御報告するには余りにも不備のものなるため過日電話にて貴掛員に打合せたる處一應報告し置く様とのことにて該当欄に記入せり 尚叙上の事由に依り寄宿舎の必要に迫られ本年度に於て建設せらるゝ様貴施設局へ申請中ですから申添へます

右文書に添付されている調査表（草稿）によれば、仮寄宿舎の現

況は凡そ次のとおりであつた。

昭和二十三年五月三十一日現在

寄宿舎主管課部 生徒課 課長 生徒課長文部教官 西本順

在籍生徒総数 六六五名（男六〇六）

宿舎居住生徒総数 九五名（男のち）

設備 総面積一六二坪 一人当たり面積一坪半〜三坪

寄宿舎費 徴収せず

給食施設 「本校の食堂は寄宿者生徒用としての経営に非ず一般

生徒の集會所に喫茶程度のもを賄ふを主とするも生徒居室に

於て炊事せらるゝは危険なるに依り配給物資を食堂に委託加工

に依り食事を取り居るに付き寄宿舎食堂と趣きを異にするも一

応照会欄に記入す

食堂二カ所、総面積七六坪、利用生徒数二二〇（男二〇〇）、炊夫

または炊婦四名、食費（主食委託者、朝六円、昼十円、夕十円五十錢）

翌二十四年、学校当局は校内居住者（教官、生徒）について「個人使用中の学校施設調査綜合月報」を作成している。次の表はそれに基づくものであるが、これを見ても校内は避難所のような有様であつたこと、特に倶楽部は内部を小さく区切つて大勢が起居するという不衛生で危険な状態にあつたことがわかる。

種別	氏名	施設	坪数
文部教官	菅原安男 外 六人	門衛所付属家	二室 九坪
〃	日下喜一郎 外 四人	園丁控室	二室一〇坪
〃	松田権六 外 四人	倶楽部	三室一三坪
〃	内藤春治 外 三人	〃	二室一二坪

